

山下麻衣 + 小林直人

× 小堀 望

CPUE: おふたりは今回、「対話」から「telepathy」という作品にどのように落とし込まれたのですか？

山下 (以下 Y): 対話といえば、私たちは2人組ですし、制作も日常も常に対話とも言えますね。

小林 (以下 K): 今回はすごくダイレクトにふたりの「対話」というかたちをとりましたけど、普段の作品では、「僕ら」対「なにか」という対話がほとんどで、私たち同士がお互いに向き合ったことっていう作品は実はないんです。それは初の試みだったんです。とはいえ、特に山下が言葉とか信じないタイプなんで (笑)、言葉ではない対話に挑戦したわけです。

Y: 喧嘩をよくするんですが、喧嘩のときってたいして思ってもいないことを言って、話がよくわからない方向に進んでいくじゃないですか。そういう意味では言葉ってあんまり信用できなくて、思っていることからズレていく感覚をいつも感じるんです。

Y: だから私としては、もう少し言葉ではないところで繋がっていると感じたかったんですけど、普通に個の壁がありましたね。

K: 制作の時も、イメージが完全に共有できているかと思いきや、意外にずれてたりすることがあるからね。

Y: だから、ツールとしては言葉を使わないとコミュニケーションってとれないんだなあ実感しました。いろいろ考えさせられました。

CPUE: 「+ 1」の1は今回「観客」だったんですね。普段作品つくるときに、お客さんってどのくらい意識なさるものなんですか？

K: 僕らが何かをするというのが、例えば山を登って彫刻つくるでも、

船を6ヶ月なめ続けるでも、そういったちょっと特殊な経験だと思うんです。その結果をみなさんにみせるわけですけど、それで疑似体験のようなものができるんじゃないかと。普通はかばかしくてやらないような経験も、僕らがやっているさまを見て、それがどういふことなのか想像することができる、そういう感じで観客との距離を捉えていますね。人って経験の共有だと思うんです。山登った人、宇宙に行った人、それぞれみんなひとつの人間として多くの経験を共有して、イメージを頭の中に蓄積していこうとしていますよね。

Y: 海外で制作をしていることもあって、言葉なしでも誰にでもわかるような作品づくりになって、わりと万国共通なんです。やっていることはすごくストレートな行動が多いので、あんまり観る人と理解にズレは少ないですね。言葉では難しいことも、作品の方が語ってくれているのかもしれない。その意味でも、作品は私たちにとってのコミュニケーションツールといえますね。

